

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 20 日現在

機関番号：37301

研究種目：基盤研究 C

研究期間：2009～2011

課題番号：21520040

研究課題名（和文） 像と場のパースペクティブから、絶対者と場所という問題群を再検討するための基礎研究

研究課題名（英文） Basic Researches to reexamine Problem Group called the Absolute and a Place, from the Perspective of an Image and a Field

研究代表者

木村 博 (KIMURA HIROSHI)

長崎総合科学大学・人間環境学部・教授

研究者番号：20341555

研究成果の概要（和文）：研究成果は、像と場の内的連関を明らかにしたことである。フィヒテは、三段論法を知の根源的形式として重視する観点から、小前提を事実知としてとらえる独自の視点を提示し、小前提の重要な意義を解明する。すなわち、根源的で事実的な知のうちにあるものを、三段論法の形式において再生産することである。たしかに、事実的知は、法則によって限定される。けれども、どうじに、法則はただ事実においてのみ可視的となる。換言すれば、限定された事実的知のもとで無限な法則がみいだされることをもまた意味する。こうした小前提に凝縮して示されている像こそ江渡狄嶺の場に通底する。すなわち、小前提は、そこにおいて大前提と小前提が出会い、両者が合致する、そうした場なのである。

研究成果の概要（英文）：Results of my research are to have clarified the internal linkage among an image and a field. From the original viewpoint of attaching great importance to a syllogism as a fundamental form of knowledge, Fichte explains a minor premise as the knowledge of the fact and elucidates the important significance of the minor premise. In other words it is to reproduce certain things, which are inside of the knowledge of the fact, in the form of the syllogism. The knowledge of the fact is surely limited by a law. However, the law becomes only visual only in a fact. In other words, an infinite law is found under the limited knowledge of the fact. The image which is condensed into such a minor premise is linking with the field of Tekirei Edo. The minor premise is such a field where a minor premise meets a main premise in there, and both are equal.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
2011年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	2,500,000	750,000	3,250,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学、哲学・倫理学

キーワード：像、場、絶対者、場所、事実知、三段論法

1. 研究開始当初の背景

<像と場>というパースペクティブは一般的に知られているものではない。たしかに、<絶対者と場所>という問題群については、従来のドイツ観念論および近代日本思想の比較思想的研究において取りあげられてきたものである。けれども、像と場というコンテクストは、ドイツ観念論および近代日本思想そのものと密接な連関をもつものであったにもかかわらず、これまでずっと看過されてきたテーマである。

研究代表者は、「国際フィヒテ学会」における講演 'Fichte und Tekirei Edo -- Bild und Feld --' (ミュンヘン大学、2003年)で、つぎのような問題提起をおこなった。すなわち、像と場という問題群は、ドイツ観念論の哲学者ヨハン・ゴットリープ・フィヒテ(1762~1814年)と日本近代思想における江渡狄嶺(えどてきれい、1880~1944年)のなかで深く結びつき独自の展開を果たしたものであること、像は知がみずからを超えていくとどうじにみずからに内在する場であり、そうした像の世界こそそこにおいて「われわれ」が生きる場にほかならない、と。さらに3年後におこなわれた同学会での講演 'Das faktische Wissen und der minor im syllogismus -- Fichtes Einsicht in der >> transscendentalen Logik << --' (ハレ大学、2006年)において、像の特性が「映し」にあること、そしてその映しが端的に事実知を表している点に着目した。むろん、事実知が事実知にとどまるだけであるならば、そこから積極的な意義を引き出すことはできない。だから、事実知をその根拠から、すなわち知の知としてとらえることが肝要となる。けれども、そこに付随するいっそう困難な問題は、いかにして事実知を知の知としてとらえることが可能となる

かを究明することである。この究明を、フィヒテは、三段論法の小前提に焦点をあてることによって遂行する。すなわち、小前提こそ事実知にほかならず、この事実知のなかに知の知との不可避的連関が埋蔵されているのであり、したがって、こうした小前提における事実知の分析からえられるものこそ大前提と結論にほかならない、と。

これにたいし、場は、研究代表者が「場と場所——江渡狄嶺と西田幾多郎——」(共編著『現代に生きる江渡狄嶺の思想』所収、農文協、2001年)において示したように、たんなる有ではないし、たんなる無でもない。ぎゃくに、そうした有および無をそのように成立せしめる根底である。だが、この場はけっして西田幾多郎の「場所」ではない。場は、「家稷(かしょく)」(耳慣れない概念であろうが、たとえば、ハイデガーの「近さ」の概念を想定すればより理解しやすいであろう)であり「特称拠」の次元だからである。なるほど、西田幾多郎もまた「特殊者」を語らないわけではないとしても、その特殊が西田哲学においては明確な位置づけがなされているわけではない。西田哲学において、個物と一般者は、外的な結合によるのではなく、自己のなかに絶対を見、絶対のなかに自己を見するという絶対の相反するものの矛盾的自己同一によって果たされる。この線上においては、しかし、特殊者の位置は、絶対の個物と絶対の一般のあいだを浮遊するものとなる。つまるところ、特殊者とは、「限定された場所」つまり「有の一般者」でしかない。有の一般者という規定は、裏を返せば、特殊者の固有の規定を喪失させるもの、である。

以上から、像と場の究明は、知がものをとらえるしくみ、その根本構造をあらたな角度

から照出するものとして浮上してくる。その参照点こそ、像の哲学が示す映しであり、場の哲学が示す特称拠である。この次元は、翻って、像や場をそういうものとして論じうる地平がいかにして成りたちうるのか、そのことを可能とする条件とはなにか、を分明する根底的次元である。

本研究は、像と場の隠れた水脈を、それぞれの理論的バックグラウンドをなすドイツ観念論および近代日本思想との連関において掘りおこす。そして、像と場のパースペクティブから絶対者と場所の問題群の再検討を意図するものである。

2. 研究の目的

像と場の哲学は、フィヒテと江渡狄嶺を透かして、さまざまな哲学との連関を表出する。たとえば、三段論法における最大の重点を小前提にみるフィヒテの視点は、ヘーゲルの推理論と鮮明なる対照をなす。この点は、フィヒテの像とヘーゲルの絶対者との異同を端的に表出するものである。また、フィヒテの像は、シェリング同一性哲学の「自然」との区別と連関をも内包する。さらに、場の哲学は、西田幾多郎の場所だけでなく、田辺元の「種」との異同という包括的な問題群にも連接していく。田辺元は、個と種の絶対否定的関係を重視し、その絶対否定的媒介を類として洞見した。本研究は、こうした問題の拡がりや連なりを視野に入れ、近代日本思想とドイツ観念論におけるいわば草の根の対話を遂行しようとするものである。

以上の角度から、本研究は、まず、これまで看過されてきた像と場の本質的連関に着目しその独自性を解明する。研究代表者のみるところ、像と場の独自性とは、それぞれ「行為」と「行」と不可分だという点にある。つぎに、像と場の固有な問題性がそれぞれドイツ観念論および近代日本思想との連関を内包

するものであることを明らかにする。さいごに、もういちど像と場の問題群に立ち戻り、絶対者と場所との連関を視野に入れてとらえかえたとき、それがいかなる現代的意義をもつことになるかを明らかにする。

3. 研究の方法

本研究は、研究代表者がこれまで培ってきた比較思想的手法を積極的に取り入れる。その手法の特徴的な意義は、比較する両者の近さと遠さを浮き彫りにすることをおして、それまで見えにくかった論点を照出するところにある。研究代表者は、これまで、フィヒテと江渡狄嶺との比較思想的考察をおこなってきた。①「行と行為——江渡狄嶺とフィヒテ——」（比較思想学会第5回研究奨励賞受賞論文、比較思想学会編『比較思想研究』18号、1992年）②「単校教育理念と相互人格性——江渡狄嶺とフィヒテ——」（『江渡狄嶺研究』第28号、1995年）③'Fichte und Tekirei Edo -- Bild und Feld --'（Fichte-Studien Bd.30, hrsg. von H.Girndt, Amsterdam - New York, 2006）。さらに、研究代表者はこれまで江渡狄嶺と安藤昌益におけるキーワードである家稷と直耕の比較研究に着手してきたが、この比較研究は、視野をマルチカルチュラルにまでひろげるものとしてきわめて重要なものとなった。参照、④「マルチカルチュラルをめぐる議論に固有な視点を提示する農思想の一断面——安藤昌益と江渡狄嶺——」、平成13年度～平成15年度科学研究費補助金（基盤研究 C1）研究成果報告書『マルチカルチュラルの思想的・文明論的研究』（課題番号13610047）、2004年。これに加えて、家稷の研究は、梁漱溟の郷村建設理論との連関を照出する拡がりを見せた。参照、⑤「家稷農乗学と郷村建設理論——江渡狄嶺と梁漱溟——」（比較思想学会編『比較思想研究』26号、2000年）。

本研究は、こうした比較思想的手法をとおして遂行される。

4. 研究成果

究代表者は、ベルリン国立図書館で調査を行い、フィヒテの *Magnetismus* の手書き原稿のコピーを入手した。その後、ブリュッセルで行われた国際フィヒテ学会で 'Fichte und Schelling' と題した講演を行った。さらに、翻訳でも、フィヒテ全集第 18 巻所収の、「動物の本質解明のための諸命題」「動物磁気療法にかんする日誌」を翻訳し、刊行した（共訳『超越論的論理学・自然哲学』所収、哲書房、2009 年）。以上の成果は、本研究の課題である像と場を軸としたフィヒテと江渡狄嶺の比較研究の礎石をなすものとして意義づけることができる。

さらに、研究代表者は、編著『フィヒテ——「全知識学の基礎」と政治的なもの——』（創風社、2010 年）の刊行をとおして、フィヒテとドイツ観念論との関連およびフィヒテと江渡狄嶺との関連を吟味した。前者に関しては、フィヒテの第一根本命題をめぐってシェリングやヘーゲルの解釈との異同を明らかにした。後者に関しては、フィヒテが事実的な視点を応分にふまえながらも、それにとどまることなく、さらに事実的視点から発生的視点に上昇し、それによって発生的視点から事実的視点に下降する、そうした自己還帰を説いたように、江渡狄嶺も、日常性を基礎としながらも、ほかならぬ日常性の染汚を喝破することをとおして、日常性のあるがままの姿への立ち戻りを説いたことを明らかにした。

さいごに、研究代表者は、像と場の内的連関を明らかにした。フィヒテは、三段論法を知の根源的形式として重視する観点から、小前提を事実知としてとらえる独自の視点を提示し、小前提の重要な意義を明解する。す

なわち、根源的で事実的な知のうちにあるものを、三段論法の形式において再生産することである。たしかに、事実的知は、法則によって限定される。けれども、どうじに、法則はただ事実においてのみ可視的となる。換言すれば、限定された事実的知のもとで無限な法則がみいだされることをもまた意味する。こうした小前提に凝縮して示されている像こそ江渡狄嶺の場に通底する。すなわち、小前提は、そこにおいて大前提と小前提が出会い、両者が合致する、そうした場なのである。以上の確認は、本研究全体にとって大きな意義をもつものとなった。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 1 件）

- ①（書評）木村博『感性の精神現象学——ヘーゲルと悲の現象論——』（大橋良介著、創文社）『実存思想論集』——実存思想協会編——XXV（第二期第 17 号）、2010 年、175—179
- ②（書評）木村博『未完のフィヒテ——激動のベルリンを舞台にした一哲学者の「生」のドラマ——』（石崎宏平著、丸善プラネット）『フィヒテ研究』——日本フィヒテ協会編——第 18 号、晃洋書房、2010 年、101—106
- ③（翻訳）柴田隆行・鈴木恒範・竹島尚仁・小島優子・黒崎剛・木村博訳『ヘーゲル——引き裂かれた媒辞』その 2、（Van Der Meulen : Hegel Die gebrochene Mitte）『ヘーゲル論理学研究』——ヘーゲル＜論理学＞研究会編——第 16 号、天下堂書店、2010、83—143
- ④木村博「『超越論的論理学』におけるフィヒテの洞見——事実知と三段論法におけ

る小前提——」、『長崎総合科学大学紀要』
第 52 巻、査読有、2012、1-7

〔学会発表〕（計 1 件）

- ① KIMURA HIROSHI : Fichte und
Schelling – Um den ersten Grundsatz
– [in Bruessel]
Okt. 2009, Der siebte Kongress der
Internationalen J. G.
Fichte-Gesellschaft

〔図書〕（計 2 件）

- ①限元忠敬、松本正男、木村博訳：フィヒテ
『超越論的論理学・自然哲学』、『フィヒテ全
集』第 18 巻、哲書房、2009
②木村博編『フィヒテ——「全知識学の基礎」
と政治的なもの——』、創風社、2010

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等
無し

6. 研究組織

(1) 研究代表者

木村 博 (KIMURA HIROSHI)
長崎総合科学大学・人間環境学部・教授
研究者番号：20341555